
百怪 妖の怪 2 4 話

annmin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百怪 妖の怪24話

【Zコード】

N4379M

【作者名】

annomi

【あらすじ】

私は10年ほど前、一時だけ仏道の修行に身を置いたことがあります。

今ではすっかり生臭となつて日々の生活に追われる身ではありますが、それでもある習慣は残りました。

それは“怪しい話”の収集です。

修行時代に聞いた話から、プライベート、
仕事の関係なく、人々から聞かせて頂いた
不思議な話。

中には、聞いた事のある、または派生系の
お話もあるかもしませんが、どうか
お口汚しを。

「丸太」

聞いた話。

元々木こりをしていた人で、
かなり年配だが、今でも時折り
山に入るという方から、
こんな話を聞いた。

彼の父親もまた木こりをしていて、
よく連れられて山に入つていった。
仕事の手伝いもあるが、まだ小さい頃は
出来る事も限られていて、ほとんどは
遊んでいた。

気に入つていた遊びは木登りで、
高い木を見つけては登り、
そこから見える景色に入つていたという。
そのうち、ただ登るだけではなく
なるべく高い木を選ぶようになり、
日々もつと高い木はないかと
探し回つていたそうだ。

ある日の事、見た事も無い高い木を見つけて
彼は、さつそくチャレンジする事に。
幹に手をかけ、するすると登つていく。
なんだか表面がザラザラしていて、

それが滑り止めみたいになつて、今までのどの木よりも登るのが容易だつた。

突然、木が倒れ始めた。

ただ自然に倒れていくのではなく、何かゆつくりとその幹を地面に押しつけようとしているかのようだ。抱きつくようにしがみついていた幹がブルツと震え、倒れたそれは、木々の間をぬうぬうにして前進していく。

慌てて手を離し、その木が奥へ奥へ消えていくのをただ見送つた。

「蛇、とも思つたんだけど。
あそこまでいくと龍だな、ありや」

父親のところへ戻り、その事を話すと顔色を変えてすぐに下山し、それから数日は山仕事を休んだといつ。

「引き潮」

聞いた話。

ゲーム会社に勤める20代の男性、その父親に関するお話。

彼の父親の実家は茨城にあり、
海に近い場所にあった。

後に自衛隊の駆逐隊代表にまでなった父は、
体力があり、大学生の頃はいろいろな
トレーニングを自分に課していた。

その中で、夜の海で泳ぐというのがあった。
どうしてそんなトレーニングをしていたの
かは知らないが、元々体力があり、
体を動かすのが好きという性格からか、
疲れるまで運動するには並大抵の事では
ダメだったらしい。

ある日、どうしても沖に出てから戻れない
事態になった。

1キロ沖に出てから浜辺に戻る、というのを
日々続けていたのだが、その日は泳いでも
泳いでも浜に近づく事が出来ない。
幸い、ちょうど通りかかった漁船に拾われ
たが、その漁師に説教された。

「引き潮の時は、どんなに泳いでも
沖まで出るな、
絶対に戻れなくなるから、みたいな事を
言われたらしいんです」

翌日、彼は再びその時間、つまり引き潮の
時を狙つて沖へ泳ぎだした。
“確かめてみたかった”という。

「聞いてて、“バカ”というのが
精一杯でしたね」

1キロほど沖へ泳ぐと、なるほど潮に乗つて
スイスイ進む。

しかし、帰ろうひとつすると浜辺から
押し戻されるような力を受けて、
戻る事が出来ない。

「それで、漁師から聞いていた方法を
試したって言うんです。」

“浜辺を一直線に目指すな、
ジグザグに泳げ”って。

緊急時の対処法として教えてもらつた
らしいんですけど、それを確かめるつて
……やっぱりバカでしょ」

確かに、ベクトルとしては真正面から
行くよりも、斜めに突つ切つて泳いだ方が
理にかなつてている。

時間はかかるが、段々と浜が近づいてくる
のを見て、“おお、本當だ”と実感しつつ
泳いでいた。

浜辺まで後半分くらいか、と思つた時、
ふと何かの気配に気付いた。

自分と並んで、何かが海中にいる。
暗くて良く見えないが、かなりの大きさの
ものが。

“こんな大きな魚がこの近辺にいたか?”

サメが出るなんて話は聞いた事はないし、何より背びれは見当たらないから、その心配はしなかつたものの、暗闇の海中でいきなり現れた同伴者に、いい気分はない。

なるべくそれを見ないようにして、浜辺を視界の中心に置いて泳ぎ続けたが、何せジグザグに泳いでいるので、いずれはそいつの方へ舵を切らなければならぬ。

そして、その時に全体を見てしまった。

「大きい、何でものじゃなかつたそうです。海中の影が沖までずっと続いていてどこまで続いているのか全くわからないへりへりに」

驚き慌てたものの、ここは海の真っ只中。この大きさの物に襲い掛かられたら、どうなるものでもない。

観念して、少しでも浜に近づくべく泳ぎに専念する事にしたところ。

やがて浜の明かりが地平線のように全体に広がり、足がつく深さにま到来ると、それは姿を消していった。姿が消えると同時に恐怖が蘇り、泳ぎも何もなく浜辺を目指した。

陸上へ上がり、体を拭いて火を起こし、冷え切った全身を暖めていると、昨夜、自分を拾ってくれた漁師がやって来た。

漁師は“またお前か”みたいな顔をしたが、彼はそれに構わず今起きた事を早口で漁師に伝えたという。

「カイジンか」

驚くでもなく、漁師は開口一番そう言った。
おそらく、海神、という事だろう。
あれを見たらどうなつてしまふのか、自分はこれから大丈夫なのかをたずねると、

「こんな夜中に身一つで沖まで泳ぐ
バカがいるから、珍しくなつて見にきた
だけだろう。
機嫌損ねないうちに、こんな事ア
止めるんだな」

事も無げに言つと、そのまま去つて行つてしまつた。

その父も、今はすでに定年退職しているが、時々は公共機関に頼まれて、水泳指導に行つてゐるらしい。

しかし彼の記憶では、プール以外で、海でも川でも水に入る父親は見た事が無いという。

「一本道」

個人的に仏道の修行を一時した事があるのだが、その時の同僚の話。

彼が自転車に乗つて横断歩道を渡つていた。もちろん青信号である。

と、その時突然かなりのスピードを出した自転車が目の前を横切つた。

運転していたのは老人である。

車道側から青信号の横断歩道を一気に突つ切ろうとしたらしい。

「危ないっ！？」

目の前を老人の乗つた自転車が横切り、とつさにハンドルを90度回転させた彼は、代償として顔面からアスファルトの地面に突つ込んだ。

事故の原因となつた老人は一時こちらを振り返つたが、状況を察知してか一目散に車道に沿つてそのまま逃げてしまつた。

救急車が呼ばれ、意識がはつきりしていた彼は自らの足で車両へと乗り込んだ。

警察も現場検証に来ていたが、

「人を避けて事故を起こした」と誰かが証言してくれていたにも関わらず、

「でもですねえ、それが転倒の原因とは限りませんし……」と面倒くさそうに対応しているのが耳に入ってきたという。

病院に着くと、鼻の頭と左側が裂けており、それを縫う事になった。

左手で多少は受身を取つたせいか、後は右足が少し擦り切れただけで、治療後、そのまま自宅へ帰る事を許可されたという。

血が流れたので、とにかく鉄分補給のために帰宅途中に、そのテの栄養ドリンクを何本か購入した。

家に着くと、すぐに食事と一緒に胃に流し込んで、彼は布団に入った。

「何てツイてないんだ」

目を閉じると、それなりに体力を失つていたのか、時間を置かずに寝入つた。

気がつくと、彼は一本道を歩いていたといふ。

「何ていうのかな、森の中とか都会とかそういう道じゃなくて……

真っ暗な中、白い道を歩いている感じ」

その道を歩いていると、いきなり猿が現れた。

まるで道を通せんぼしているかのように

醜悪な顔付きをして、こちらを威嚇し、襲う気満々という事は一目でわかった。

ふと彼は、自分が棒を手にしていた事に気付いたという。

猿が襲い掛かってきたところを、その棒で打ち付ける。

何度も何度も打ちつけるが、その度猿は、退きながらも再度攻撃の機会を伺うように離れない。

何度も打ちつけている内に、猿は弱っていき、段々と動かなくなつていった。やがてピクリとも動かなかつた猿をまたいで、ようやく立ちふさがつていた道を進もうとすると、そこで目が覚めたという。

「そこで思い出したんだ。

関係あるかどうかはわからないけど

病院から帰宅する際、彼は医師から注意を受けていた。

「今日一日は絶対安静にしてください。吐き気や目まいがしたら、即座に救急車を呼んで」

顔面を強打したので、24時間は脳出血に用心しなければならない、との事だった。朝、渡された薬を飲もうとした時に、詳しい注意書きを見つけたといつ。

「あれを殺さなかつたら、どうなつていたんだろうね。まあそんな事よりも」

結局、事故は自損扱いになり、治療費と眼鏡代と自転車の修理代が自腹だつた事の方が問題だと、彼は憤慨した。

「ゴースト」

とあるチャリティーに参加して頂いた、大道芸をしている外国人の方から聞いた話。40代と思われる彼は、10年くらい前から来日していて、日本語も日常会話に支障のないレベルで話せる。

今は日本人の奥さんと結婚し、永住資格も手に入れ定職もあり、そこそこ収入は安定していると言つていた。

だが、来日したての頃はそれこそ決まった住所も無く、滞在期限が切れるまで、よく各地を転々としていたという。

「よくヒッチハイクしていたね。
歩かなきやいけない時もあつたけど、
山の中とか、日本はたいていどこも
道がしつかりしていたから」

その時も、たまたま車の通りが無く、
仕方なく夜の山道を歩いていた。
雲一つ無い月夜で、外灯の光が田畠のよつこ
元通りと先々を照らしている。

「で、いきなりパラパラツて
降ってきたんだよね、雨が」

月は相変わらず夜空に浮かんでいる。
雲も見えず、一体何があったのかと
戸惑うが、別にそれほど強い降りでも
ない。

気にする事もないかと、一歩踏み出した時、

「その道の、こちらから見て右側かな?
茂みから何か飛び出してきたんだ」

向こうの外灯が縦に細長いシルエットを
形作る。
動物……ではない。
目をこらして見ると、どうもそれは
たたまれた傘のようだった。

それは、柄の部分をくの字に曲げながら、

ピュー、ピュー、ピューと跳ねるように道を横断して、反対側の茂みへと消えた。気が付くと、小雨は止んでいたという。

「日本では、傘もゴーストになるんだね」

……それは多分、ゴーストじゃない。

「石段」

30代後半のグラフィックカーの男性から聞いた話。

彼は高校時代、眼鏡店でアルバイトをしていたそうだ。

シフトの日が土日に重なった時は、そのお昼に母親が用意してくれたお弁当を、神社の境内で食べるのが楽しみだつたという。

その神社は都内とはいえ、周囲がかなり自然豊かで、境内に行くまでの石段から神社の社殿に至るまで、夏の日中でも木陰で薄暗いほどに

彼がいつものように、境内でお弁当を食べようと石段を上つていた時の事。ふと、何気なく空に目をやると、木々の

葉の隙間から、白いものが見えた。

「……旗？」

それは、無地の長い布のように見えた。その日は風が強く、横なぐりの強風が吹き荒れていて、どこかの洗濯物がそれで飛ばされたのかな、くらいにしか思わなかつた。

足元を見ながら、一段一段上つていくと、ちょうど最上段の入り口のところに、白い布が落ちていた。見たところ、幅50cm、長さは5メートルほど。

「あの布が落ちてきたのかな、と思つたんですけど」

彼の足が階段を上るを止めた。これだけ強風が吹き荒れている中を、多くの木々に囲まれたこの場所にどの木にも引っかからず落ちてくる事など、有り得るのだろうか？

可能性としてはゼロではないが……疑問と同時に背筋に冷たいを感じた彼は、くるりと背を境内に向けた。

後ろへ向きを変える時、視界の片隅でその

布が、糸で吊るされたように浮き上がった
ような気がした。

恐怖と混乱で、彼は一氣に下まで
駆け下りた。

下まで来ると、おそるおそる境内を
見上げた。

そこには、いつもの石段が木漏れ日に
照らされているだけだったという。

「流す」

愛媛県出身の女性から聞いた話。

すでに初老、といつてもいいくらいの歳の
彼女は、幼少の頃不思議な体験をした。

近くの小川にかけてある橋、その上で
下の水の流れを、お菓子を食べながら
ただながめていたのだが、ふと一つ
落としてみる気になつたという。

「ふ菓子を食べていたんですけどねえ。
何ていうか、どういう風に流れしていくのか
見たかったんだと思います」

少し千切つて川に落とす。

それは当然水に浮いて下流へと流れしていく。

10メートルほど流れた地点で、ふ菓子は水中へと消えた。

「でもねえ、それが妙に思えて」

水を吸つてだんだんと水中に沈んでいくのではなく、一気に水の中へ消えたような、そんな感じがしたのだという。

もう一度見てみようと、少し干切つてはそれを川に落とす。

何度も繰り返すうちに、彼女はある事に気付いた。

「近付いてきたんですね」

ふ菓子が水中に消えるまでの時間が、落とす度に早くなつてきていた。

それは見る見るうちに橋の真下近くにまで

怖くなつてきた彼女は、残りのふ菓子を思い切り下流へと放り投げた。

すると、それを追いかけるように、水中で影が下流へと素早く向かつたといつ。

彼女は振り返らずに家まで走った。中では祖母がお茶を飲んでいたが、今見てきた事を泣きながら訴えると、祖母は優しく頭を撫でながら言った。

「そんなの、陸おがに上あががつていりや
怖くも何ともない」

祖母はそれが何か知つていたみたいだが、なぜかそれ以上聞いてはいけない気がして黙つていた。

「ただな、あまりうかつに川に何か
もう流してはならんよ」

以来、彼女は東京に出てくるまで、祖母の言葉を守つたといつ。

「あの時は怖かつたんですけど、今は
懐かしく思えてねえ」

次に里帰りする時は、孫と一緒に菓子を流してみるつもりだと、彼女は微笑んだ。

「廃屋」

「山はね、いろんなものを見ますよ」

そう語りだしたのは、あるゼネコンの下請け会社に勤め、つい数年前に定年退職した男性だった。

彼は、主に測量を担当していたという。工事が決まるとき、規模や揃える人員を決めるために、仲間と一緒にそこへ向かう。

ある時、依頼を受けてかなりの山奥まで入った事があった。

道といえば獸道としか言えないような道しかなく、明らかにもう十年以上は人が出入りしていない場所だったという。

目的の地点まであと少しという時、視界に入ってきたものがあった。

それは、漆喰の壁が一枚、ポツンと木々が開けた場所に立っていた。

「朽ちた廃屋とかは珍しくないんだけど、ああいうのは初めて見ましたね」

近付いて見ると、壁の近くに腐つて根元から折れた柱や、家の基礎となる土台やらが確認出来た。

ここに人が住んでいた建物があったのは、確かな事だつたが

「でもね、普通建物つていうのは何でもそうだけど、たいてい柱以外から崩れるんです。柱が無くなれば、他は建つていられません。

いわば骨が無くなつたという事ですから

だから、柱が朽ちているにも関わらず、壁が残っているのを、仲間と一緒に不思議そうに見ていたという。

仕事もあるので、足早にそこを立ち去り、一通り測量を終えると、元来た道を引き返した。

途中、そこも通つたが、その時には壁はきれいにさっぱりと消えていた。

「仲間も、『あれ？ あそこに壁あつたよな？』と言つてましたから、記憶違いではないと思います」

ふう、と一息入れると、彼はこちらに視線を戻し、

「あれは、あれからどこかへ行つてしまつたんですかね？
それとも、あの時だけ戻つてきていたんですかね？」

そう、イタズラっぽく目じりを曲げた。

「酒」

とあるボランティアで行つた老人ホームの男性から聞いた話。

彼が子供の頃と言っていたから、年齢からして、戦後間もない頃だと思う。

「当時は、ペットボトルとかいつものはなかつたからな

お酒を運ぶのは一升瓶か、徳利といわれるモノ。

両方とも“割れもの”で、その持ち運びには神経を使つた。

「あの頃は、何でも貴重でね。

落として割つたりしたら怒られるなんてモンじや済まなかつた」

ある時、家で父親とその知人が酒を飲む機会があつた。

酒が進み、足りなくなつたお酒を買いに行けと言われたが

「その時の田舎の夜つていうのは、本当に

真つ暗闇なんだ。

月が明るいって感じるんだからわ」

夜道は怖いが、父親のコブシはもつと怖い。彼は空の一升瓶を持つて、それに酒を注いでもうつたため、酒屋へと向かつた。

両側に田んぼだけの、何もない一本道を

歩いていると、背後に気配を感じた。

振り返ると、そこには大きな影が月を背後にして立っている。

「何というかな、すごい大きな猿だった。
ただ、そいつの目がなあ」

鼻の上にたつた一つ、大きな目がギロリとこちらをにらんでいた。

ひつ、と息を飲むと、ゆっくりとこちらへ近付いてくる。

彼は一升瓶を抱きかかえながら、後ずさりして距離を開けようとするが、それに合わせるように猿も歩みを進める。

「それで、いつも親父がちょっとした傷なら、お酒を吹き付けて治しているのを思い出して」

一升瓶のフタを開けて、少し手の平に流すと、そいつに向かつて投げつけた。

「逆効果だった」

その猿は飛び散ったお酒を地面に顔を付けて舐め始めた。

どうやら、田当てはお酒だったらしい。しかし、持つて帰らなければ父親に酷く叱られるのは目に見えている。

結局、彼は後ずさりしつつお酒を散らしながら、猿をやり過ごす事にした。やがて集落の明かりが近付いてきた頃

「ふつ、て消えちまつたんだ。

どこかに行くでもなしに、目の前で」

彼の手には半分まで減つたお酒が残つていた。

怒られるだろうが、それでも全部無駄にしなかつただけマシか、などと考えながら家の扉を開けた。

当然、父親は激怒したが、それでも彼は今起きた事を話すと、一緒に飲んでいた知人が父親を止めた。

「とにかく明日の朝まで待て、みたいな事を言つててさ。

何かワケがわからんかったが」

翌朝、家の前に大小の山芋が積まれていた。中にはアケビやビワもあり、家族はそれを見てポカンとしていたといふ。

「その知人はマタギでね。

アイツが何か、知つてたんじやないかな」

死ぬ前に、もう一度あの猿に会いたいと、

彼はお茶をすすりながらつぶやいた。

「唇」

聞いた話。

知人が小学生の頃、父方の実家に里帰りした時の事。

家族で山に入り、ふと偶然に荒れ果てた神社を見つけてしまった。

物珍しさに探索する彼に、両親、特に父親は何も触るな、と注意した。

彼は妙な日本人形や文字の入った木の札等を見つけたが、父親の言いつけを守りそれらには手を出さなかつたという。

そこにいたのは30分くらいだったと当人は記憶しているが、帰つてからが大変だった。夜、就寝前に唇が腫れ上がつてしまい、しかもそれがすごしかゆかつたそうだ。

彼は祖母に、昼間神社跡に行つた事などを話した。

両親の話との食い違いがあつたものの、祖母は“よし、任せとけ”と言つてそのまま外へ出て行つてしまつた。

しばらくするとウソのよつに唇の腫れは収まり、同時に祖母が帰ってきた。

“今日はもう寝ろ”と言われ、かゆみから解放された彼は、そのまま眠りについたといふ。

翌朝、祖母にどこに行つたのか聞くと、例の場所に唐辛子をまぶした生肉と、水を入れたバケツを持っていったらしい。生肉を放り投げてしばらく待つと、ひいひいと泣き声が聞こえてきた。

「家の孫に悪さしたのはどいつだ？
治せばすぐ水をやるわ」

暗闇に向かつて話しかけると、闇の向こうから声が返ってきた。

“悪かった”
“怒るのは当然じゃ”
“カソニンしてくれ”

そんな言葉が聞こえ、祖母はバケツを置いて帰ってきたのだといふ。

「ただ、不思議なのは、両親は神社跡には行つてないって言つんですねよ。

昔の茶屋の跡に行つただけ、それも5分くらいしかいなかつたって」

祖母も、あの山には神社などなかつたと言つていた。

一体あれは何だつたのかと聞くと、

「子供が珍しいから、ついイタズラしに出てきたんだろうな、みたいな事を言つてました」

「何が？」と祖母に聞くと、“イタチかムジナだなあ”と答えたといふ。

「横切る」

福祉施設に勤める女性から聞いた話。

夜、自宅で寝ていると、自分の布団の上を横切つていく何かの気配を感じた。

「重きも感じたので、夢ではないと
思うんですけど」

それはネズミだった。

それも、ハムスターなどの愛玩用ではなく、子猫ほどもある大きさのドブネズミ。
それが3、4匹ほど彼女のお腹の上を通り過ぎていく。

彼女が息を飲んで驚く中、それらは次々と

布団の上を通り、そしてその先のTV画面へと消えていった。

「真っ暗な画面に吸い込まれるように
消えていつて

当然TVは付けてないんで、後には
黒い画面が残っているだけでした」

次の日、布団に入るとまた気配がする。
今度は毛並みが黒いウサギが3、4匹、
また布団の上を横切つてTV画面の中へ
消えていった。

「次の日は小さな馬がまた3、4匹
現れて……
で、たまらなくなつて近くのお寺に
相談に行つたんですね」

そこの住職は事情を聞くと、すぐに自宅に
来てくれた。
そして部屋をぐるりと見渡すと、ある物を
指差した。

「これはいけませんな」

鏡があつた。

小さな立て掛け式の鏡があつたが、それが
ちょうどTVと向かい合わせに置かれて
いたのだという。

それは電源の付けていないTVの画面に

鈍い光を反射させていた。

「鏡をその場所から移動させたら、

その日から何も現れなくなりました」

あのまま鏡を置いていたら、最終的には何が現れたんでしょうね？ そう言って彼女はため息をついた。

「例年」

お寺の同僚から聞いた話。

私より4、5才ほど年下の彼は、毎年夏になると父方の実家へ里帰りしていたといつ。

大自然の中、近くの川へ釣りへ行ったり、山に入つて虫を捕つたりと、子供心にもそれは待ち遠しい季節だった。

「でも、楽しみはそれだけじゃなかつたんですよ」

田舎に帰るもう一つの楽しみ

それは、女の子に会う事だった。

親戚の？ と聞くと彼は首を横に振り、

「最初は僕もそう思つていたんですけど、

「どうも違つていたらしくて

彼女と初めて会つたのは、もう使われて
いない、木材の集積小屋みたいなところ
だつたという。

結構大きく、ハシゴで1階と2階と行き来
するような建物だった。

「必ず会える、というわけでは
なかつたんですが」

それでも小屋に行くと、2、3回に1回は
そこにいて、よく遊んだという。
遊ぶのはいつも二人きりで、なぜかそれを
話してはいけない気がして、親にも黙つて
いた。

「今考えてみれば、怪し過ぎますけどね。
でも何ていうか、女の子と遊んでいる
自分があの年代では特別な存在のよう
思えて」

それは中学に上がる頃まで続いたらしく。
しかし、彼が中学に入つて1年目の夏、
いきなり彼女からお別れを言われた。

「もうあなたには私は見えなくなるから、
いきなりそんな事を言われて」

中学2年の夏、もうその小屋に行つても

彼女はいなかつた。

「大人になつたつて事なんですかねえ」

不思議な事に、その彼女の顔や着ていた服など、全く思い出せなかつたそつだ。

しかし今でも田舎に帰つた時は、その小屋に毎日顔を出しているそつである。

「畠」

学生時代からの友人で、今は自衛隊にいる知人から聞いた話。

今は潜水艦乗りらしいが、新人の頃は一通り訓練され、もちろん地上での訓練も受けたといつ。

「林の中とか山の中とか、夜戦もしたよ。

戦争になれば昼も夜もないからな」

関東のとある基地に勤務していた頃、地上戦の訓練があつた。

朝から3昼夜通しての、ハードなものだつたといつ。

「最後の夜かな。もう少しで終わりだつて時に、妙な体験をしたよ」

その時は、山のふもとで斜面の木々の間を他の仲間と歩いていた。

枯葉を踏む音と、時折入る無線の音だけが闇の中に響く。

と、いきなり先頭で歩いていた仲間が声を上げた。

同時に体勢を崩して転ぶのが目に入った。何やつてるんだ、そう思った時

「いきなり地面が揺れたんだ。

で、ドミノ倒しみたいにパタパタと、自分も含めてみんな倒れてしまった

地震かと思ったが、感覚がおかしかった。全体が揺れるのではなく、足の下だけが動いたような感じだったという。

やがて木々のざわめきの他に、何か引きずるような音が聞こえた。

暗闇なのでよく見えなかつたが、平らな黒い何かが、斜面を上つていくのが見えた。

「何ていうか、縦に5、6畳ほど敷いた畳が動いているような感じだつたよ」

倒れた原因は、どうやら仲間がその上を知らずに歩いて、それが動いた事によるものだつたらしい。

訓練が終わり、報告の中にその事も入れて

教官に提出したのだが、

「それはよくある事だからいちいち書くな、
だつてさ」

ウンザリした表情の教官に、アレは何かと
聞いたが、 “ 気にしても仕方がないものを
気にするな ” としか答えてもらえなかつた
といつ。

「侍」

同じ歳の知人から聞いた話。

彼の実家は岐阜にあり、よくそこで仲間と
一緒に、サバイバルゲームで遊んでいた。

「まあ過疎つてやつでね。

ちょっと山に入れば、犬と老人くらいしか
おらんかつたし」

だからサバイバルゲームをやるには持つて
こいの環境で、時間さえあれば山に入つて
二手に別れて対戦を楽しんでいた。

「ある時、山を一回りして相手の裏をつく
作戦を立てたんだ」

山と言つても小さく、少し高い丘くらいなもので、30分もあれば回りこむ事が可能だった。

歩き続け、もう少しで、といつといひでそれは突然目の前に現れた。

「何ていうのか、昔の侍みたいな格好をしてた。ただそいつが」

その男は手に刀を持ち、今にも襲い掛かつきそうな感じだつたといつ。

振り上げられた刀をそのままに、ポーズをとつているかのように停止している。

「ただ、ほり。

こつちもサバゲーの最中だつたし、当然モテルガンだけど銃は持つていたわけで」

無意識のうちに、仲間も一緒にそいつに銃を向けていた。

彼の目はそれに釘付けで

やがてジリジリと足を後退せると、一目散に逃げ出した。

サバイバルゲームビンゴではなくなり、二手に別れていた仲間に連絡を取り、彼らは慌てて下山した。

「みんなで俺の家に戻つて、警察に連絡

するかどうか話していたんだけど。

爺さんがやつてきて

“そりや山の狐か狸だらう”って

驚かせようとして出てきたものの、まさか銃を持っているとは思わず、逆にびっくりして逃げたのだろう、との事だった。

「そんな事より、 “それよりあそこはマムシも出るんだ、氣いつける”って言われた事の方が怖かつたよ」

そう言って、彼は頭をかいだ。

「
履物

通っているお寺の近くにある、保育園の保母さんから聞いた話。

園児たちを連れてハイキングに行つた際、その中の一人が行方不明になり、大騒ぎになつた事があつた。

結局、その子は夕暮れと共に見つかつたのだが、発見された時に不思議な事を言つていたらしい。

「何でも、林の中で迷つて泣いていたら、

髪の長いきれいなお姉さんが、“迷子になつたの？”って聞いてきて。その子がウン、って答えると、手を引いて林の外まで連れてきてくれたんだって

しかし、誘拐の可能性もある。

その後先生同伴で警察の聞き取りが行われ、その人物を詳しく彼から聞き出した。

「でもねえ、何ていうか……

まず白っぽい着物を着て、片手には変なウチワを持っていて

足には変な物を履いていたという。

絵を描かせてみると、それは一本歯の下駄にしか見えなかつた。

さらに、山伏の絵を見せると“これと同じ”と答えたといつ。

「女性の天狗って、私、聞いた事無いんですけど」

私も聞いた事は無い。

「方向」

修行仲間の知人から聞いた話。

彼の実家は愛媛にあったのだが、中学に上がる頃に東京に引っ越してきたのだといつ。

その彼がまだ10才にもならない頃、こんな体験をしたらしい。

家の近くに小高い丘があり、その頂上に神社があった。

その境内でよく遊んでいたのだが、最近になつて記憶がおかしい事に気付いた。

「そこにいた女の子と遊んでいたんですね
けど」

昔ながらの着物を着ており、それ以外は別にどうという事もない子だった。

同じくらいの年で、ただその頃は異性と遊ぶと同性に冷やかされたりバカにされたりする世代。

その事もあってか、彼はそれを家族にも話していなかつたのだが

「遊んでいた時、今思えばどうにも不思議な事があつたので」

彼女とは、よくアヤトリや手遊び歌など、2人でする遊びに付き合わされていきたといつ。

しかし、遊んでいる最中、話している方向がよく変わつた。

「正面に向かい合つても、なぜか隣りから声が聞こえてきて、振り向くとそこには彼女の顔があつたりして」

それはよくある事で、ある時は頭上の彼女と手遊びしたまま話していた事もあつた。

「当時は何とも思わなかつたんですけどね」

近いうちに愛媛に行く機会が出来たので、それで思い出したのだといふ。
その少女と遊んだのはその年の夏だけで、それ以来会つていないうつだ。

「引越し」

会社を定年退職し、今は老後を楽しんでこる男性から聞いた話。

彼は若い頃からゴルフを趣味としていて、定年後はそれが仲間との数少ないイベントとなつていた。

「でもまあ、みんな年だからね。」

「一月に2回あればいいくらいで」

ある時、広いコースを回つていた彼は、

急な天候の悪化で雨に見舞われた。

他の仲間とははぐれており、彼は適当な大きな木を見つけ、その下で雨宿りする事にしたといふ。

「嫌な予感がしてね。雷が鳴り始めて、これはマズイかなあつて」

避難する小屋はあつたものの、距離にしてそこまで300メートルはある。音と光の間隔は段々短くなつていいような気がして、彼は迷いに迷つていた。

ふと、彼の視線をさえぎつた物があつた。というより、いきなり降つてきたような感じだったといふ。

子供が立つていた。

こちらに小さな背中を向けている。年は7、8才だろうか、白地に赤い花柄の着物にハカマをはいていた。

その子供はてつてつて、と雨の中を走り出した。

危ない、と思つて追いかけよつとした時、子供が振り返つて、言つた。

「行かないの？」

「そこにはもういぢやいけないんだよ？」

わけがわからず、とにかくその子供を追いかける事にした。

どうやら、小屋の方向に向かっているらしい。

保護者が誰かいるのかもしない、そう思っていると、背後に轟音と光が走った。

「それまで雨宿りしていた木に雷が落ちてね。

あれはびっくりするしかなかつた」

子供は

そう思つて向き直ると、落雷など気にしないとでもいうよう、構わず遠ざかっていく後姿が見えた。

とにかく小屋までの方向は同じなので、追いかける形で彼は子供の後ろを走った。と、小屋まで2、30メートルまで来た時、子供が方向を変えた。

え？ と思う間もなく、子供は近くにあった木に頭から飛び込んだという。

そのまま子供の姿は木の中へと消え、後には彼一人が残された。

「とにかくこっちも小屋の中に入つてさ。

雷がおさまるのを待つしかなかつた」

雨が止んだ後、彼は子供が消えた木を探そう

と思つたが、もうじれがどの木やらわからず
断念したといつ。

「何か“宿る”つていうのはわかるけど、
引越しも出来るものなんだねえ」

そのゴルフ場は今も健在で、彼も時々通つて
いる。

「半身」

ある主婦の方から聞いた話。

彼女が旦那と子供を連れて実家に里帰りした
時の事。

夫は都会生まれで、田舎に来る事を嫌がる
事もなく、むしろ満喫していた。

「よく1人で山や沢の方に出かけちゃつて。
子供はまだ小さいから旦が離せないし、
両親は孫にべつたりだし。

今思えば、気を使つてるのもあつたん
でしょうけど」

しばらく散歩でもしてきます、と言つて
出かける夫に、義父である彼女の父は
必ず声をかけた。

「何か危ない目にあつたら、川を飛び越えて
帰つてくるんだぞ」

その意味はわからなかつたが、いつもいつも言つてゐる事なので、何か習慣かそういうものなのだろうと勝手に納得していた。

そうして両親、そして自分の子と3代水入らずの時間を過ごしていると、夫が今まで見た事も無い形相で家に駆け込んできた。

「み、水を」

慌てて水を「ツッピ」に一杯くんで差し出すと、それを一気に飲み干した。
何があつたのか聞くと、一言一言思い出すよに声を絞り出した。

「半分、半分の女が」

言つてゐる事がわからず母親と顔を見合せたが、ただ1人父親だけが顔色を変えて玄関へと走つていつた。

「……いねえ。おい、ちゃんと川飛び越えて
きたのか？」

その問い合わせに夫はガクガクと首を縦に振る。

「そつか。それなら大丈夫だ。
もう心配するな」

あつけに取られる3人を横目に、その輪の
中心にいた子供を彼はあやし始めた。

「後で夫に聞くと、沢を散歩している時に
女人に……
出会ったというか、いきなり背後に
現れた、と本人は言つてました」

後ろを振り向くと、視界の隅には入つて
くるのだが、必ず背後に回りこんでくる。
長い髪がたなびき、その下に着物の裾の
ようなものが映り込む。

それ以外何かされるでも無いが、人気の
無い沢でこんな事をしてくる事自体、
それがまともな存在ではない証明でも
あつた。

「とにかく逃げても動き回つても、必ず
背後に回り込むんだって。

その時、父にいつも言っていた言葉を
思い出したらしいの」

目の前の川に足を入れ、急ぎ足で対岸へと
向かった。

と、その時初めて視界の隅から女が消えた。
対岸まで来ると、女が川の向こう側で立ち
止まっている。

「美人だつたつて……こんな時まで男つて
いつのはつて母と一緒にあきれてしまい
ましたけど」

しばらく見ていると、女が川の中へ足を
入れた。

「お、く、う」

何の変哲も無い、せいぜい水深2、30cm
くらいの川の中で、その女は苦痛で進めない
といわんばかりにうめいていた。

とにかく足止めにはなつてゐるらしい。
だが家は反対側なので川を渡らなければ
帰れない。

しかしあの女がいる川には入りたくない。
少し上流の方に橋があつたはず、そこを
渡れば、と思ってそちらへ目を向けた瞬間

「バシャンッ、て水の音がして。
で、思わず女の方をまた見てしまつたん
です」

あの女が倒れていた。
真横に。

その半身を川面から出して、片手で彼を
にらみつけていたといふ。
もうまともな存在では無い事はわかつて

いる。早く上流に行こうと走りかけた
その時

「起き上がった……夫の言葉を借りれば
まるで横になっていた棒がひとりでに
立ち上がったようだつたつて」

そして、その立ち上がった女には、川に
入っていた半分が無かつた。

その半分になつた口から、またうめき声。

「はう、ぐ、ひー」

その後は叫び声を上げて、上流の橋を渡つて
そのまま家に駆け込んだといつ。
母と2人で信じられない話に戸惑つていると
父が笑いながら口を開いた。

「そこまで追いかけられたとはなあ。
よほど氣に入られたんだなあ、お前

あれは何なのか夫が聞くと、基本的に男
だけを追いかけてくる、女には害は無い
(というか見えない)、流れている水は
渡れない、と言つた。

「あれは一体何なんですか?」

「神サマ、とまでは言わんけど、まあ
山に住む何かと思えばいい。

今のところ、人取つて喰つたつていう
話は聞かんから」

父は終始カラカラと笑っていた。

「でも、今までそんな話聞いた事も無かつたし、男限定なら最初から夫には注意してくれても」

もしかしたら、出来ちゃった婚なのを根に持つていたのかも、そう彼女はいたずらっぽく笑った。

「噛む」

縁日関係の、いわゆるテキ屋の方から聞いた話。

その祭りではお面を売る事にしていた彼は、当曰、現地で準備に追われていた。

ふと、面が風に吹かれ飛んでしまった。近くの雑木とも藪ともつかない中へ落ち、仕方無く彼は、中へ腕を突っ込んだ。

「いっつ！」

指先が何かに噛まれたように痛みが走った。

藪の中をのぞくと、面と田が合つた。

「いひひつ」

それは意地悪そうに笑うと、薄闇に溶ける
ように消えてしまったといつ。

慌てて元の場所へ逃げ帰つたが、見ていた
仲間から質問された。

どうやら、仲間には飛んでいったお面が
見えなかつたらしく、いきなりどこかへ
行つたように見えたそうだ。

「後から考えてみれば、あんなお面、
扱つてた中には無かつたな」

獣と人の中間のよつなお面だつたといつ。

「アメ細工」

前記のテキ屋さんから。

別に本職ではなく、仕事は普段土木関連に
従事しており、テキ屋になるのは地元の
縁日の時期だけらしい。

「他から流れてくる人がほとんどだ。

そういうのは組合があつて、屋台とか火を

使わない道具とかは、各自治体が管理・保管しているって聞いたな」

そうして各自治体から必要な時だけ、場所や道具を借りるのだという。

「最初は、そういう流れの人たちの手伝いから入つたんだよ」

だから別にテキ屋も、お面が専門というわけではない。

その時その時で、クジ・金魚すくい・鉄砲・食べ物系も何でもやつてきた。

「ある時、アメ細工の屋台を手伝っていた時があつたけど」

その屋台の主が所用で離れてしまい、その間の店番を頼まれた。

もう人通りもまばらになり、そろそろ終了という時刻だったので忙しくは無かつたが、そこへ小さな客が現れた。

「兄妹かな。今時珍しく、2人とも浴衣でそれがよく似合つてた。

10才と4、5才くらいに見えたが

兄と思われる方が、「ちょうどいい」と言つてきた。

「お金はあるのかい？」

それには黙つて答えず、ただ一番上に飾つてあるアメ細工を指差した。

「それがよりによつて一番高価いやつでね。まあ高価いと言つても500円くらいだつたから、後で立て替えてやつてもいいとは思つたんだけど」

それ以前に、上の段のアメ細工は鶴や龍をかたどつたもので、目の前の兄妹が持つには不釣合に思えた。

「んー、じつちにしないか？」

イルカとウサギ型の安いアメ細工を渡すと、兄の方は不機嫌そうな顔をしたが、対照的に妹と思われる女の子の顔が笑顔になつた。

「……今年は、これで」

当たり前のように受け取ると、その兄妹はアメ細工をそれぞれ片手に去つていつた。

“（こ）（アメ細工）の知り合いかな？”
マズイ事をしたかな、そう思つていると屋台の主が帰つてきた。

「あちやー、弱つたな。

今回は俺の店に来たのか。

直つ通り渡してくれりや良かつたのに

やつぱり知り合い？ と聞くと、バツが
悪そうな顔をして、はつきりと答えない。
店をたたんで、打ち上げをして帰るつかと
言つ時、忠告された。

「帰りに気をつけてくれ。

多分、そんなに悪さはないと思つが」

奇妙に思いながら家への帰り道を歩いて
いると、何かが胸元に張り付いた。

「足長バチ。それが胸の袂から中に入つ
きやがつて」

パニックになつて、腕を振り回したり胸元を
叩いたりしたが、これといった痛みは無い。
観念して、とにかく家まで戻る事にした。

家につくと服を脱ぎ、裸になつた。
見ると、胸元に5ミリほどの羽虫が胸の
素肌に喰らいついたまま死んでいるのを
発見。

何も感じなかつたが、離す時に少しだけ
チクッとしたという。

「『一方が氣に入ったからだつたな。

それだけで済んだのは』

その後で言われたよ」

- ・ あれは何だ？ と聞くと、
- ・ こちらも良くわからないが、ぞんざいに扱つてはならない決まり。
- 前々からそう言われている。
- ・ 基本、男女の姿で現れる。
- ・ 年齢はその時によつて異なり、老夫婦の時もあれば、赤子を抱いた女性の時もある。

くらいしか聞けなかつたという。

「魚突き」

「いづやスつていうやつで突くんだけどね。
フォークのでかいのみみたいな。
今のガキどもはやらないかな」

東北出身の方から聞いた話。

彼の田舎は文字通り自然が豊富で、夏ともなればタンパク質系の獲物は、田や小川へ行けばいくらでも獲れた。

「魚も夜寝るから、頭にランプ付けて夜突きにいくんだ。

面白いほど取れたよ」

獲物は魚に限らず、エビや沢ガニなども

対象だった。

それらは大人たちの晩の酒のツマミになつたり、翌日の朝食に出たりする。

岩陰に隠れている魚を突いては、竹製のカゴに入れていく。作業のように突いた魚を引いた時、ヤスがいきなり重くなつた。

「何か引っかかったかな？」

そう思つてライトをその先にあてたんだが

岩と浅瀬の茂みが照明で浮かび上がる。よく見ると、ヤスの先の魚が何かに挟まつているように見えた。

何かと思つて近付くと、グイッと背中が引かれた。

一緒に魚突きに来ていた仲間の1人だったが、その方へ振り向くと同時に

「逃げるぞ！！ つて怒鳴られた。

みんな一斉に逃げていくんで、俺も怖くなつて逃げたよ」

川から離れ、一番近い人家の近くまで来た時、逃げたわけを仲間に聞いた。

「何でもよ、ハサミが見えたんだと。

俺が突いた魚を、片側が大人の手くらい
ある蟹のハサミが挟んでいたと」

20年程前、彼の小学校の頃の話だという。
その川も多少整地されたものの、未だ残つて
いるらしい。

「ヒツ、カナ」

山登りを趣味とする初老の男性から
聞いた話。

「北関東の生まれでさ。
周りがみんな山。」

「山なんて珍しくもなんとも無かつたのに」

それでも趣味になるくらい、山には何かしら
魅力があるらしい。

「だけどね、俺あ今でも家の近くの山だけは
登らない」

「どうして？」と聞くと、怖いから、とボソッ
と答えた。

その山は子供の頃からの遊び場で、特に
険しいというものでもなく、山というより
丘と言つた方が正しい程度のものだつた。

「遊び場って言つたけど、俺だけじゃない。
あの辺のヤツラはみんなあそこで遊んで
いたんだ」

ただ、大人たちからは常に注意された。
特にまだコンクリート舗装されていない
川の上流に行く事は厳禁だつた。

「それを聞かないのがガキつてものでね。
大人が見回りをして、とつ捕まえては
よく張り倒していたよ。
ま、俺もその張り倒されたうちの1人
だけだ」

その上流は両岸が切り立つた崖のようになつて
いる地形があり、そこが安全上の
問題になつていた。

「飛び込みやすい地形だもんな。

10mはあつたんじゃないか？」

そりや、度胸試しにや格好の条件だよ」

飛び込んだ後、また飛び込むには川に沿つて
下流に戻り、そこから崖上への道をたどれば
いい。しかし、それには時間がかかる。
面倒くさいから誰もやらない。
ではどうするかといふと、

「崖を登るんだよ、バカだから。

ロッククライミング？ つていうのか。
ああいつ要領で」

崖の途中で突き出でている突起部分や、生えて
いる木の枝などを器用につかみながら、崖上
まで登るのだといつ。

「で、俺が登つてた時なんだけど。
落石にあつたんだ。
それほど大きい石じゃないけど、
顔くらいの大きさはあつたな」

危ない！ という仲間の声に顔を上げた時
には、もう田前まで迫っていた。
子供心にも“あ、死んだ”と思つたといつ。

その瞬間田をつむつた。

しかし、いつまで経つても石がぶつかる
気配が無い。

恐る恐る田を開けると、頭上で誰かが
背中越しに腕を突き出し、石を握つて
いた。

その突き出された手は爪が異様に長く、
しかし腕回りは白く細かった。

「ヒツ、カナ」

その声で、後ろにいる存在は女性だと
気付いた。

その気配が消えるのと同時に、仲間の声が戻ってきたという。

「後で聞いたんだが、落石が俺の真上で岸壁にぶつかって跳ねたと。

運が良かつた、良かつたって」

それ以来、彼は飛び込みを止めた。仲間も、それを臆病とは言わなかつた。また、改めて危険を認識した事もあり、飛び込みは誰彼言つ事なく行われなくなつていつた。

彼は、子供の頃は父親が怖くてそれを黙つていたが、一緒に酒を飲めるようになった時、それを初めて明かした。父親はじつと彼の目を見て言つた。

「止めて良かつたな。

それと もうあの山には入るな

父親が言つには、まだヒヨツ子、未熟だから助けてくれたのだろう、との事だつた。

「ヒツ、カナは“ひ若いな”と言つたのだろうと説明してくれた。

年下や未熟者を見下す言葉、だとわ

しかし、今さら山に積極的にに入る気も無いが、どうして入つてはダメなんだ?

そう父親に聞くと、

「お前は田を付けられた。

釣りだって小魚が釣れたら逃がすだろ？
次は、無い」

その父親も10年前に鬼籍に入つたという。
未だ独身の彼は、もし死期がわかれればあの
山に登るよ、と笑つた。

「代金」

大道芸をしている知人のお話。
彼の実家は東北地方の、ある温泉宿
だという。

海沿いにあるその温泉は、岩をそのまま
浴槽として利用した露天風呂で、
それほど有名ではないものの、遠くから毎年
やってくる客も少なくないところだった。

彼が10才くらいの頃、家業の手伝いを
やり始めた。

最初の仕事は岩風呂へ朝の見回りに
行く事だったが、その岩風呂の端に、
魚が打ち上げられている事があった。

「でもねえ、妙なんですよ。

魚はまだわかるにしても、サザエとかアワビとかある日もありましたから」

それは、1ヶ月に1、2度くらいの割合であつたという。

それを持って帰ると、決まって朝食はその魚介類になつたが、次の日から2、3日は父か祖父が朝の見回りを変わつた。

「その間、僕は別の仕事を言いつけられたんで、遊べる時間が出来るわけでもなくて、嬉しくも何ともなかつたんですけど」

それから3年ほど経ち、彼が中学生になつた頃

朝の見回りの仕事は相変わらず続けられたが、たまたま、まだ日が昇る前に見回りに行つた事があつた。

「それでも、いつもの見回りより1時間程度、早いくらいでしたけどね。

水平線はすでに明るくて、もう少ししたら日の出かな、くらいの」

岩風呂に近付くと、パシャッという音が聞こえた。

“え？ 誰かが入っているのか？”

しかし、こんな時間に客に入らせる事は

無い。無断で入っているとなると、すぐに家に知らせなければならない。

確認のため、彼は岩陰からのぞき込んだ。

そこには、妙齢の女性の後ろ姿があった。髪はストレートで長く、陶器のような白い肌が薄闇に映える。

まさか無断で入るような人間が女性とは思わず、彼はいささか混乱した。

「まあ、初めて女性の裸を見てしまったといつのもありますか」

やがて海に一直線に光が横切ると、湯浴みしていた彼女はその両手をゆっくりと岸の岩に付いた。

“上がるのかな？”

なおもその裸体を目で追つていると、そのまま半身を引き上げる。

その腰から下にはウロコがあつた。上半身が向こうの闇に溶け、そして尾びれが上下逆さまとなり視界から消えた。

岩風呂の向こうはそのまま海である。

呆然としてしばらく立ち尽くしていたが、気を取り直してその場所に向かつと、そこには立派なイシダイが1匹、そしてサザエが3個置いてあった。

彼は戻ると、父親に今見た事を話した。
すぐに祖父も呼ばれ、彼の目を見つめながら
こう話したという。

「美しいと思つても人間ではないんじや。
あまりうかつに近付くなよ」

それからは決して夜明け前に岩風呂を見回る事はしなかった。
その温泉宿は今でも健在だが、未だに時々魚や貝が“打ち上げられる”事があるそうだ。

「巻きつぐ

50代半ばの男性から聞いた話。

彼はトラックの運転などの仕事を転々としてきた、いわゆる肉体労働者である。

彼には息子が一人いたが、子供が生まれてからすぐに奥さんに先立たれてしまい、男手一つで息子を育ててきた。

今では息子も大学生にまでなり、よひやく一息つけるようになつたという。

「しかしなあ、子供つてホント、生まれた頃から記憶を持っているんじやないかな

彼の話によると、最近息子からこんな事を言わされたらしい。

「 なあ 親父、 家には 赤、 蛇がいたよな？
つて 」

借家ではあったが、仮にも都會の一戸建てである。

しかし、彼には心当たりがあった。

赤ん坊の頃の息子は不思議と手がかからなかつた。

泣き叫んだり、ぐずつたりするという事がなかつたといつ。

ある時、オシメを換えようとベージーベッドに近付くと、ロープのような物が赤ん坊に巻きついている。

驚いて近付くと、はつきりとそれを確認した

彼は大声を上げた。

「 白い蛇がよつ、 ひづ、 全身に巻きついて
いたんだ 」

慌てて取り払おうと手を伸ばすと、白蛇はスルスルと外へ出て行ってしまった。

後には、スヤスヤと眠っている赤ん坊がベッドに残された。

それから、息子の寝床に蛇の物と思われるウロコが落ちている事が何度もあった。それは息子が3才くらいになるまで続いたが

「ある日、息子が“白い蛇を見たよ”って言つてきたんだ」

それまでは、余計な心配をかけまいと、息子にも蛇の事は言つてなかつた。とうとう気付かれたか、とも思ったが……

「その時あたりからかな。
パツタリと止んだんだ。ウロコも姿も見せなくなつた」

師にその話をして、それは母親でしうが、と聞いてみたが、

「ま、向いに行けばわかるこつた」

そつ言つて取り合わなかつた。

「いめんね」

聞いた話。

父親が山小屋の管理をしていたという

男性から、こんな話を聞いた。

「もちろん、他に何か仕事はしていたで
しょうが
僕が幼い頃に離婚してしまいましたので」

夏になると、彼は登山客相手の山小屋で、
その手伝いをしていた。

もちろん、学校に上がればそれは夏休みに
限られたが。

基本的には夏しか手伝いに行かなかつたが、
一度だけ、冬に手伝いに行つた事があると
いつ。

「夏とは全くの別世界でしたね。
これが本当に同じ山か、と思つてからここ

雪が降れば、一面真つ白の銀世界となつた。
あまり標高が高くない、中腹よりも下に
山小屋はあつたが、それでも吹雪があつたり
すると、遭難の危険性も高くなる。

夏とは違い、近くの川で釣りをしたり
虫を取つたりは出来ないが、

その初めての経験に彼は興奮していた。

「晴れていれば、足跡すらない世界に
飛び出して行けるんですから。
雪だるまを作つたり、つららを折つて
鍋に入れて溶かしたり。

それなりと言つか、かなり楽しんでいたと思します」

それは、山小屋に来てから一週間ほど経った夜の事。

彼は父親と一緒に布団を並べて寝ていたのだが、コンコンと扉をノックする音が聞こえた。

風か何かだと思っていた彼は、

薄く開けた目を再び閉じる。

しかし、今度は何かボソボソと声が聞こえた。

女性の声で、どうやら彼の名前を呼んでいるらしい。

「お母さん……？」

山小屋に来るのは父親と自分だけで、母親は家で留守番をしているのが常だった。

山小屋に行くのは魅力的だったものの、母親と離れる事に対する寂しさは当然彼にもあって

そこへ自分の名前を呼ぶ女性の声。

飛び起きたと、すぐに木の扉を開けた。

「でも、開けるとやうには誰もいなくて

勢いよく開いた扉の向こうには、チラチラと雪が降り始めているだけだった。

どこかに隠れて、驚かせようとしているのかも

そんな考えを持つのは、やはり子供だからだろうか。

それほど広くも無い山小屋の周りを、母親の姿を求めて走り始めた。

すでに周囲は暗かつたものの、山小屋から漏れるランプの光が一面の雪に反射して、暗闇というほどではない。

ちょうど扉のある場所から反対側に回った時、それはいた。

少し離れた場所に、白い和服を着た女性が立っている。

当時は和服とは認識していなかったがその足は地面には着いていない。

文字通り宙に浮いていたのだ。

母に甘えられるといつ希望は、一気に恐怖へと変わった。

同時に、本能が身を隠せと全身に告げる。彼はまず、10メートルほど離れた

ところにある、夏の間に冬用の薪を溜めておく簡易小屋に走った。

鍵は掛かっておらず、飛び込むと同時に体を縮める。

「つぶふ……ビリヒーるのかしら？」

突然、頭の上から聞こえたその声に
耐えられず、全力疾走で簡易小屋を離れる。
次に目指したのは、昼の間に作った雪だるま
だった。

その影に身を潜めて、様子を伺つ。

「それで隠れているつもり？」

今度は背後から声が聞こえた。
観念して、父のいる山小屋へ戻ろうと
駆け出す。
雪に足を取られて上手く走れないが、
笑うような声は容赦なく後ろから
迫つてくる。

山小屋まで後数メートル、といつとこりで
前のめりに転んでしまった。
声はそのまま冷氣と共に彼に覆いかぶさる
ように
もうダメだ、そう思つた瞬間。

ふと、風が一瞬だけ止んだ気がした。
そして、あの女性の声が

「あははは、ごめんねえ……」

それはボリュームを最大から最小へ
絞るよに、小さく消えていった。
顔を上げると、父親がこちらに
駆けてくるのが見えた。

そこで彼は意識を失ったという。

気が付くと、白い天井が見えた。

寝ている場所も、山小屋のせんべい布団ではなく、ふかふかのベッドで

彼は病院へ搬送されていた。

首を横に曲げると、そこには両親がいて、目を覚ました彼に気付くと、母親はそのまま彼を抱きしめた。

同時に、父親に対し罵声を浴びせたという。

「その後すぐに両親が離婚してしまって。

僕の親権は母が取りましたから……」

父親も争つ姿勢は見せず、親権もあつたりと手渡したといつ。

その後、父との交流は無い。連絡も全く来ないそつである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4379m/>

百怪 妖の怪 24話

2010年10月20日15時50分発行